Asuka in Strange game

aya

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ａｓｕｋａ　ｉｎ　Ｓｔｒａｎｇｅ　ｇａｍｅ

【Ｎコード】
Ｎ７１００Ｚ

【作者名】
ａｙａ

【あらすじ】
ある日、飛鳥の家の前にゲーム機が落ちてきた。
それを拾おうとしたら、ゲームの中に入っちゃった?!
オリキャラ視点の話です。

ｇａｍｅ－１－（前書き）

こんにちは、ａｙａです。
ホントは、オリキャラじゃなくて、蘭ちゃんにしようと思ってたんですけど
オリキャラの方がおもしろいかなと思いしました。

game－1－

１２月下旬・・・
冬休みで学校が休みになった子供たちは
楽しく公園で遊んでいた。もちろん、帝丹小に通っている飛鳥もだ。
・・・正確には、ベンチで楽しそうに小説を読んでいるだけだが。

「ねぇ、君一人？一緒に遊ぼうよ！！」

小説を読んでいた飛鳥に見知らぬ男の子が声をかけた。

「・・・・ごめん。今、小説読んでるから今度でいい？」

飛鳥は男の子の顔を一瞬だけ見て、本を見ながら答えた。
男の子はつれないなぁと言いながら、ブランコの近くにいる友達のところへ行った。

飛鳥は本から顔を上げて周りを見渡した。
もうすぐ日が沈みそうだった。

ビルの隙間から見える夕日は気持ちが悪いほど真っ赤だった。
この街を、この世界をその真っ赤な炎のような色で飲み込めるほど・・・

「早く家に帰ろう・・・」

そう飛鳥は呟き、本を持って公園を出た。

「・・・・・ただいま。」

家に帰り、飛鳥は玄関でそう呟いた。
普通の家庭なら家族が“おかえり”と出迎えてくれるだろう。
だが、帰ってきた飛鳥を誰も出迎えてはくれない。

なぜなら、彼女の両親は今海外で暮らしているからだ。
だが飛鳥には兄がいる。
でもその兄は今ここにはいない。

「・・・また、事件か・・・・・。」

そう、理由は“事件”だった。
飛鳥の兄は有名な高校生探偵工藤新一なのだ。
だから兄妹なのに一緒にいる時間が少ないのだ。

「蘭姉はいないしな・・・」

いつもだったら、新一の彼女の蘭が家に来てくれるが、
今日は空手部の練習で遅くなるとメールがきたのだ。

こういうときは隣家の阿笠邸に行けばいいのだが、
やっぱり兄とずっといられなかったせいか新一に甘えたいのだ。

「いつもいつも事件・・・。
蘭姉の気持ちが分かる気がする・・・」

この大きな家で小学一年生一人ではとても寂しい。
いつの間にか飛鳥は泣き出してしまった。

「ヒック・・ウゥ・・
早く帰って・・・来てよぉ・・バカ兄貴ぃ～～～～～！！！！」

シーン

「・・・・グズッ・・宿題しよう・・」

そう言って2階へ上がろうとしたとき、
家の外で何かが光った。

飛鳥は急いで玄関のドアを開け、外を見たら、
なにかが光っていた。
近づいて見てみると、それはゲーム機だった。

「・・・何これ？落とし物かな・・・？」

拾おうとゲーム機に触れた瞬間、
とてつもない大きな光が飛鳥を包み込み、ゲーム機の中に取り込んだ。

飛鳥も大きな光に包み込まれたときにそのまま気を失った。

ｇａｍｅ－１－（後書き）

初の連載です。
はじめっから悲しい・・・（笑）
どうか見捨てないでください！！（土下座）

game－2－（前書き）

こんにちは！！
久々です。

game－2－

「・・・・っ」

飛鳥は目を覚ました。

「ここは・・・・どこ？」

飛鳥は今までのことを思い出した。

（確か・・・家の前でゲーム機を拾って、変な光に包み込まれたんだ！）

ふと横を見ると、自分が拾ったゲーム機が落ちていた。
おそるおそる触ってみたが、何も反応がなかった。

「よかった・・・」

飛鳥はゲーム機に差し込んであるソフトを引き抜いてゲーム名を見

ると
“光の魔神と囚われのプリンセス”というゲームだった。

（これは・・・元太君と光彦君が持ってたゲームだ。
このゲームのあらすじは、ある勇者が不思議の国に迷い込んで、
その国の
お姫様を助けるっていうのだったかな・・・？）

一通りあらすじを思い出すと、辺りを見回した。

そこは、ある村のはずれだった。
だが、そこは村人がよく通る道なので飛鳥がボーッと眺めている間
にも
何人も村人が通っていった。

不思議そうに飛鳥を見ながらだが。

そんな村人の視線に気付かず、飛鳥は悩んでいた。

（どうしよ・・・このまま立ってるワケにもいかないし、
だからといってどこに行けばいいのか分かんないし・・・・どう
すればいいのかな？）

そう飛鳥が悩みながら歩き出そうとしたとき、一人の女性が声をかけた。

「・・・ちょっと、通行の邪魔なんだけど。」

前を見ると、見慣れた顔があった。

少しきついキリッとした目、すっとした鼻、きれいな形の唇、
そして赤みがかった茶色の髪がきれいに短くカットしてあった。

「志保姉ちゃん!?なんでここに?」

飛鳥は、びっくりしすぎて動揺を隠せずその場で慌てながら、名前を呼んだ。

飛鳥がいう“志保”は溜息をつき、鋭い目で睨みながら

「初対面の人に向かって・・・・それに、その“志保”って誰?
私はそんな名前じゃないけど?」

と言った。

飛鳥は、その目に少し怯みながら、

「あっ！すいません。私は飛鳥といいます。志保姉ちゃんというのは、

私の家の隣家に住んでいるお姉さんのことです。」

と答えた。

志保は「そう。」とだけ言い、飛鳥を上から下まで見た後、

「ついてきて。」

と言って、自分が来た道を戻った。

飛鳥はボーッとしていたが、我に返り、茶髪の女性の後を必死について行った。

game－2－（後書き）

何が書きたいのか分からない文ですね・・・（滝汗；）
とりあえず、ゲームの世界に入りました・・・・
駄文ですいません！！

ｇａｍｅ－３－（前書き）

新年あけましておめでとうございます。
今年も駄文ばかり書く私めをよろしくお願いします。

game－3－

飛鳥は茶髪の女性についていき、
小さなかわいい小屋に着いた。

「私の家よ。入って。」

「ありがとうございます。あの、お名前は・・・？」

茶髪の女性は少ししてから

「言ってなかったかしら？
私はシホーナ。よろしくね？」

と答えた。

「よろしくです・・・・」

飛鳥は戸惑いながら、家に入った。

<家の中>

「あなたに、頼みたいことがあるの。」

「なんですか？」

「この国の姫を助けてほしいんだけど・・・・・
お願いできるかしら？」

「・・・・・・・・え？」

シホーナは、少し悲しげに
「お願い・・・・助けて欲しいの・・・・・だめかしら？」
とお願いした。

飛鳥は、慌ててシホーナに

「あ、あの私もそのつもりであそこにいたので、
別にいいんですけどっ、どこに行けばいいのか分からなくて・・・・」
と言った。

「・・・・だったら、話は早いわ。」

シホーナはそう言い、飛鳥にあらゆる事を教え始めた。

「その姫は私の友達なの。名前はラン。
ランは、隣国のシンイチ王子が好きなの。もちろん彼もよ。
相思相愛なのよ。」

「へぇー」
（マジで?！ゲームの中でも相思相愛なのかよ?！
というより、なんで兄貴たちがゲームの中に?）

そんな飛鳥の心の中のことは知らずに、シホーナは話し続ける。

「ランが失踪した日の前の日、隣国のクドー君（シンイチ王子）が

失踪していたのよ。
だから、クドー君もランと一緒に囚われているか、駆け落ちしたか、もしくは
彼が監禁しているか。」

「・・・え、ホントですか？」

空気が張り詰めたものに変わった。

「可能性よ。確かじゃないわ・・・・ただ、彼は独占欲強いから。」

「そーなんですか・・・・」
（なんか、現実世界と変わらない気が・・・）

「あなたには、数日分の食料と水を持たせるわ。あと、地図も。
お金も、もしもの時の為に持たせてあげるわ。」

「ありがとうございます・・・！！」

「いいのよ。ランを助けてもらうためなら、なんでもするわ。
服も替えた方がいいけど・・・・」

シホーナは、そう言うと言葉を詰まらせた。
それから申し訳なさそうに言った。

「あなたのサイズにぴったりの服は持ってないのよ。」

「いいんです！そこまで・・・」

「あなた、地図見てないの？
あなたの着ている服じゃ、ぼろぼろよ。」

飛鳥は、地図を見た。
森のところには、“いばらの茂み”、“谷底と、とがった岩”など、
危険な道があった。

シホーナは、紙になにやらか書き、飛鳥に渡した。

「街に私の友達がいるの。
洋服店をしてるわ。その友達にこの紙を渡して。
きっと理解してくれる・・・・それに、服だけじゃなく武器も売ってるわ。
必要だと思ったら、買いなさい。」

「はい。友達の名前は？」

「特徴は、茶髪に、カチューシャをしてるわ。
名前はソノカ。
急いで行って！！」

「はい！！！」

飛鳥は力強く返事をすると、街へ向かって走っていった。
シホーナはその後ろ姿を見て、

「お願い・・・・」

と言った。

game－3－（後書き）

・・・・・ねむいのかな自分。
いつにも増して文がぐだぐだな気がする。
すいません・・・・

ｇａｍｅ－４－（前書き）

久しぶりの投稿です。

最近忙しい・・・（ °◇° ）ガーン

game－4－

飛鳥はシホーナが言った街に来ていた。

本当に姫様がいなくなった国なのだろうか？と疑いたくなるほど賑やかだった。

飛鳥は、果物屋の店長に声をかけた。

「すいません」

「なんだい、お嬢ちゃん？」

「茶髪で、カチューシャをつけてる人がしている服屋ってどこにありますか？」

「あぁ、あの角を曲がったらすぐだよ。
確か、スズって名前の服屋だ。」

「ありがとうございます。」

飛鳥は、果物屋の店長の言われたとおりに角を曲がった。

たしかに、目の前に店はあった。

だが・・・・・

「なんなの、これ・・・・」

そう、店長が言っていた服屋にはほかの店みたいに活気がなく、
雰囲気そのものが暗く、シホーナが言っていたソノカは死んでいる

ように椅子に座っていた。

「あのぉ～すいません。ソノカさんですか？」

ソノカは顔を上げ、沈んだ声で

「そうだけど・・・あなたに売れるものは一切ないから帰ってくれない？」

と言った。

飛鳥は一瞬ムッとしたが、親友がいなくなった彼女の心を悟って何も言わなかった。

そして、シホーナに渡された紙を出して、ソノカの前につきだした。

「何？これ・・・」

「シホーナさんからです。」

ソノカはシホーナの名前を聞き、急いで紙に書いてある文字を読んだ。

ソノカは驚いた顔で飛鳥を見た。

飛鳥は、その歳に似合わない不敵な笑みでソノカを見た。

ソノカはその顔を見たときに鳥肌が立った。
“彼”にとても似ているのだ。

そして、“この子なら助け出してくれる！”
なぜかそういう気持ちがわいてきていた。

game－4－（後書き）

よろしくです！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7100z/

Asuka in Strange game

2012年1月13日20時56分発行